わが国古代寺院の伽藍配置

森　郁夫

はじめに

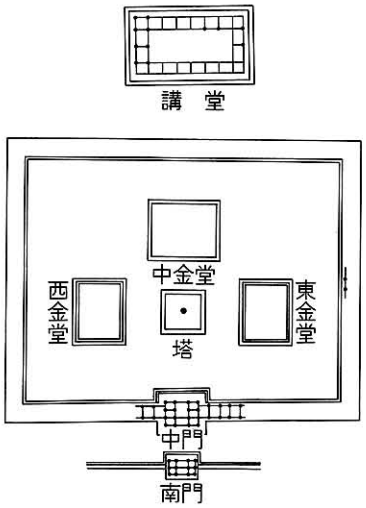
わが国古代寺院における堂塔配置、すなわち伽藍配置にはいろいろな形が見られる。それらの伽藍配置を細分すると、極端なことをいえば、寺ごとに異なるほどである。しかし、先学の研究によって七世紀代には南門・中門・金堂・塔・講堂の数や位置、回廊のとりつく建物などから七つほどの形が基本的なものと考えられている。すなわち、それらは飛鳥寺・川原寺・山田寺・四天王寺・法隆寺・法起寺・薬師寺などの寺の標式名とする配置形態である。そして、八世紀に入って大安寺式が加わる。

それぞれの寺の伽藍配置を要約すれば、次のようになる。いずれも南面回廊は中門の両妻から発する。飛鳥寺は中門の北に置いた塔の北・東・西に金堂を置く一塔三金堂形態である。東西二金堂は南北棟である。北面回廊は金堂の北に置かれた講堂との間で閉じる。[1] 川原寺は、回廊内の東に塔を、西に金堂（西金堂）を置き、さらに両者間の北に金堂（中金堂）を一棟置く一塔二金堂形態である。北面回廊は金堂の両妻に取り付く。[2] 山田寺は回廊内に塔・金堂が南北に置かれ、北面回廊は金堂の北に置かれた講堂との間で閉じる。[3] 四天王寺は山田寺式と基本的には似ているが、北面回廊が講堂の両妻に取り付く。[4] 法隆寺は回廊内に金堂と塔を東西に並置する形であり、北面回廊は金堂・塔の背後で閉じる。[5] 法起寺は回廊内に塔と金堂を東西に並置する。法隆寺における金堂・塔の配置が東西逆転した形である。しかし、北面回廊が講堂の両妻に取り付くように復原されている。薬師寺は回廊内に二棟の塔を東西に並置し、その中間の北に金堂を置く形である。北面回廊は講堂の両妻に取り付く。

このような諸形態が七世紀代の主要な伽藍配置であるが、これらのうち飛鳥寺式は特殊なものであり、飛鳥寺以外に類例が認められていない。飛鳥寺式に次いで出現したのは四天王寺や山田寺に代表される形であり、端的に言えば飛鳥寺式から東西両金堂を省いた形である。川原寺式も類例がさほど多いとは言えず、法隆寺式が新たに登場し、かなり広い分布を見せる。そして七世紀末近くに双塔式の薬師寺が造営される。また、八世紀に入ると大安寺に代表される、回廊で囲まれた金堂院の外、南に東西両塔を置く全く新たな伽藍配

置をもつ寺々が建立される。

このように飛鳥寺造営後、約百年の間にいろいろな伽藍配置が出現し、大きな流れとしては四天王寺式（山田寺式）―法隆寺式（法起寺式）―薬師寺式そして八世紀の大安寺式という変遷のあったことが知られる。伽藍配置が時の推移とともに変化するその意味には大きなものが含まれているものと考えられ、すでに先学の研究によっていろいろな見解が示されているが、系統的には未だしの感がある。小稿においては、わが国に仏教が取り入れられ、伝えられていく過程で、古代仏教に与えた内外の政治的な諸要素という点、あるいは当時における仏教観の変化という点に注目して伽藍配置の変化を考察してみようと思う。



挿図１　飛鳥寺伽藍配置図
１：2500

一　問題点の所在

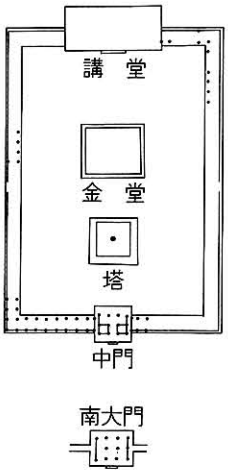
先学による伽藍配置の諸論攷では、対象とする問題点が研究者によってそれぞれ異なるので、はじめに従来の成果を紹介しながら、小稿ではどのあたりに注目していくのか、という点について明らかにしておきたい。

一口に伽藍配置に対する論攷といっても、それぞれの研究者によって観点が異なり、講堂については当初から建立されたものばかりとは限らないので、これを省いて考える場合もある。

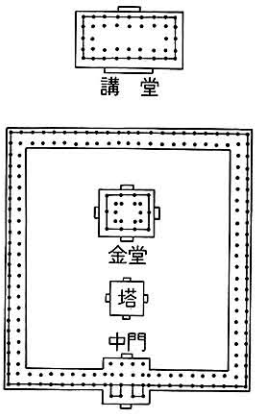
まず堂塔の配置そのものを対象とし、これに教理を結びつけた石田茂作氏の考え方がある。[6] すなわち、四天王寺式から法隆寺式への変化は現身仏（仏舎利）重視の考え方から仏舎利と理仏（仏像）とを同等に扱う考え方に変わった表われという。さらに法隆寺式と法起寺式との相違、すなわち金堂・塔を東西逆にして配置するのは左右尊卑の問題、舎利と仏像のどちらを優位に考えるのかという教理の問題、ひいては西方に極楽を認める浄土教の思想の影響もあった可能性を考えている。薬師寺式伽藍配置は、伽藍の中心に金堂を配しているので理仏本位、これに二塔を配しているので現身仏を従属視したものと考えている。[7] なお、発掘調査がまだ行われていなかった大官大寺を薬師寺式伽藍配置と考えているので、この形式の出現が天武朝初期にまでさかのぼる可能性、さらに南滋賀廃寺を薬師寺式伽藍配置ととらえ、天智朝にさかのぼる可能性さえも指摘している。ただし、この伽藍配置が流行したのは白鳳時代から奈良朝初期のこととしている。大安寺式伽藍配置については、塔を伽藍中央の回廊の外へ「駆逐」した形で、理仏中心の伽藍ととらえられている。[8]

この後、飛鳥寺・川原寺の発掘調査が行われたことによって、伽藍配置の変遷に対する考え方は複雑さを帯びることになる。

飛鳥時代には、飛鳥寺式と四天王寺式とが採用され、これらが以後の伽藍配置の基礎となって種々な型が発生するとの考え方が村田治郎氏によって示された。[9] 堂塔を



挿図２　四天王寺式伽藍配置図
１：2500



挿図3　山田寺伽藍配置
図1：2500

南北に並べる四天王寺式を東西に置き換えたものが橘寺であり、橘寺の中門を南面回廊の位置に移すと、川原寺になり、川原寺の西金堂を東西棟にすれば法起寺式となる。法起寺式の塔・金堂を東西置き換えたものが法隆寺式であるという発展過程を示している。その後の補論において、四天王寺式伽藍配置に東西金堂を加えた形が飛鳥寺式であると述べている。他にも何篇かの論攷が見られるが、近年の考え方をいくつか紹介しておこう。

回廊の意義を重視した太田博太郎氏の考え方は、塔と金堂は「仏」のためのものであり、これをとり囲んでいる回廊もこれに準ずるものであるとする。そうした観点から伽藍配置の形態を回廊の状況によって五類七種に分けている。小稿に関わるものは次に示した三類である。[10]

（一）　回廊が背面で閉じるもの
　1左右対称形　飛鳥寺・山田寺（橘寺もこれか）
　2左右非対称形　法隆寺・伊丹廃寺・法輪寺
（二）　回廊が講堂に連なり、金堂・塔を含むもの
　1左右対称形　四天王寺・北野廃寺・橘寺・薬師寺・宇佐弥勒寺
　2左右非対称形　多賀城廃寺・観世音寺・弥勒寺・相模国分寺
（四）　回廊が金堂に連なり、回廊内に建物があるもの
　川原寺・大官大寺・百済寺・南滋賀廃寺

これらの流れの中で、（一）の段階には回廊内が人の立ち入らない聖域であった。それが（二）の段階では講堂で行われる行事のために回廊に人が入るようになる。これは回廊に対する意識の変容を示すとの考え方である。そして、金堂前庭が重視され、金堂の景観上の価値が高まってくることによって、回廊が金堂に連なるようになる。伽藍配置の変化の要因をこのように捉えるのであるが、さらに唐の影響も大きいものと考えられるとしている。

伽藍配置の変化に対する「即物的な理由」として、沢村仁氏は伽藍造営上必要とする寺地の面積をあげている。[11] 四天王寺のような縦置式の伽藍配置では方一町内に堂塔は納まらないが、川原寺式のような横置式であればその中に納まるという。もっとも大官大寺のような、とくに大きな寺の場合は景観上の面が優先されたであろうと考えている。

以上の諸説に対して関口欣也氏は飛鳥時代の伽藍配置に限っているが、ほとんど外国の影響を受けたことを説く。[12] 四天王寺や山田寺のような塔を第一義とする形態は百済扶余の軍守里廃寺・金剛寺、北魏の永寧寺、西域のホータン王新寺などと共通する。そして川原寺や法隆寺のような伽藍配置は「礼仏中心に変貌した初唐伽藍へ移行する間の過渡的形式」であり、塔中心から金堂中心に移行する間の過渡期の所産とする。さらに回廊によって塔・金堂を講堂や僧坊から区分する形は北魏太祖建立の寺やホータン王新寺に準ずるといった考え方である。

いずれの考え方にもそれぞれ肯かれる点が多い。仏教寺院であるからには、当然のことながら伽藍配置の変化には何がしかでも教理

上の理由が存在するはずである。回廊の機能からの考え方も、仏・僧との区別という面からの説であり、これもひいては教理を尊重してのことと言えよう。諸先学の成果で共通していることは、伽藍配置の大きな変化が四天王寺あるいは山田寺を代表例とする塔・金堂の縦置形態から、法隆寺・法起寺を代表例とする横置形態への移行、そして、回廊内の金堂前面に東西両塔を置く薬師寺式への変化、さらに両塔が回廊外に置かれる大安寺式への発展、それらを大きな変化ととらえていることである。確かに塔・金堂が南北に配置される形と、塔・金堂が東・西あるいは西・東というように回廊内で横置される形とでは景観上から見ても大きな変化である。さらに本来仏舎利をまつる塔が回廊内に二基建立されるという形もまた瞳目すべきことであったろう。この形が定着したかどうか定かでない天平年間に、東西両塔が回廊外に置かれるという、強いて言うならば塔が回廊の外に出される形が採用される。これもまた伽藍配置変遷の上で大きな変化といえよう。

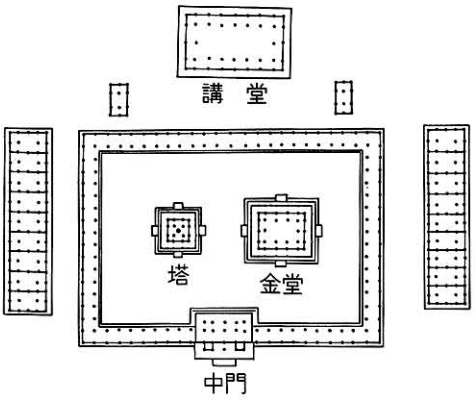
ただ、伽藍配置の変化を細部までとりあげていくと多岐にわたる。たとえば紀伊上野廃寺は、紀伊薬師寺と呼ばれるように、回廊内に双塔を置く寺として建てられた。ところが、和歌山県教育委員会によって昭和五十九・六十年と継続して行われた発掘調査では、講堂が西塔の西に東西棟で建てられ、その南北妻に西面回廊がとりつく形であることが確認された。[13] これは地形の制約上、このような配置をとらざるを得なかったにすぎず、上野廃寺の伽藍配置の特徴はあくまでも、回廊内に金堂と東西二棟を配置したところにある。したがって、それぞれの伽藍配置の変化に対して基本的な変化をもたらしたその要因が何であるのか、そのあたりのことをまず究明すべきではなかろうかと考える。小稿で問題点としてとりあげてみたいところは、何が伽藍配置の変化をもたらしたのかという点である。その要因はその時々によって異なったことであろう。政治的要因によって寺を建て替えた場合もあった。再建法隆寺が、四天王寺式から法隆寺式に変えられたのはその典型的な例であり、先年の穴太廃寺の発掘調査でも確認された。穴太廃寺は伽藍中軸線を大津宮殿舎の方位に合致させて建て直されたことが明らかにされた。[14] と同時に伽藍配置も法隆寺式に変えられている。穴太廃寺の建て替えの時期はちょうど金堂と塔を東西に置く伽藍配置が好ましい形と考えられていた時なのであろう。

このように伽藍配置の変化の流れを概観してみると、きわめて常識的であるが、塔・金堂を縦置する四天王寺式がまずあって、しかる後に回廊内に金堂・塔を横置する法隆式寺式・川原寺式、回廊内に双塔を置く薬師寺式、回廊外に双塔を置く大安寺式という形が出現していった。そこで小稿では伽藍配置変遷の中で、常識的な点ではあるが、一方で重大な変化ととらえるべき金堂・塔の配置の変化に焦点をしぼって検討を加えることにする。

二　法隆寺式伽藍配置の成立

四天王寺式伽藍配置をもつ寺々がなお造営されている頃、法隆寺式や川原寺式伽藍配置をもつ寺が造営され始めたのであるが、それは何時のことであろうか。金堂・塔を横置する形式の代表名である、法隆寺・法起寺の造営年代をまず検討する必要がある。

四天王寺式伽藍配置をもった法隆寺（若草伽藍）の創建年代は七世



挿図4　法隆寺1：2500

紀の初頭であるが、この寺は天智九年（六七〇）に火災で焼失した。そして新たな伽藍配置をもつ寺として現建された。したがって、再建年代は六七〇年以降のことである。

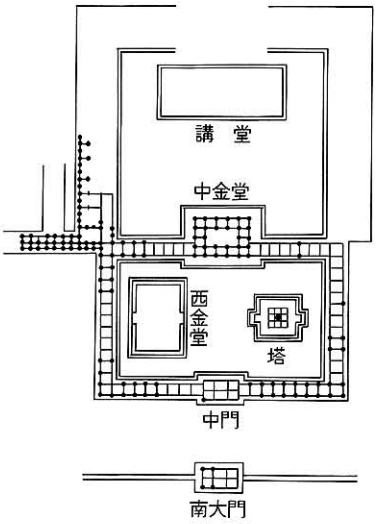
一方、法隆寺と金堂・塔の位置が逆に置かれる法起寺の建立年代については『聖徳太子伝私記』にみえる「法起寺塔露盤銘文」によって舒明十年（六三八）に金堂が営まれ、天武十三年（六八五）に塔の造営工事が行われたことが知られている。[15] 金堂造営から塔建立まで約五十年の間があり、古代において寺院造営に長い時を必要とするといっても、これはいかにも長すぎる。寺域内で行われた幾度かの発掘調査によって、現在の三重塔に先行する建物遺構が検出されている。[16] しかし、それらの造営方位は三重塔の方位とは異なっている。そのことは、寺の造営工事が始められてからのある時期に全面的に建て替えられたか、あるいは大きな計画変更があったと理解すべきものであり、この時に「法起寺式伽藍配置」で営まれたものと考えられるのである。したがって、金堂・塔を横置する形式の一部である法起寺は再建法隆寺の造営年代よりも降ることになる。

ところが、再建法隆寺より古い時期にすでに法隆寺式伽藍配置をもつ寺が造営されている。同じ斑鳩地域に造営された法輪寺は昭和二十五年の発掘調査によって回廊内の東に金堂、西に塔を置き北面回廊が両者の背面で閉じるものであることが確認されている。[17] 縁起の上では、法輪寺は推古三十年（六二三）に聖徳太子の病気平癒を祈って山背大兄王と由義（弓削）王が発願したとか、天智九年の法隆寺焼亡の後、再建のための寺地が定まらないままに、法隆寺再建に備えて百済の開法師（あるいは聞法師）・円明法師・下氷新物の三名が三井の地に寺を建てたとなっている。いずれも正確な説とは言い難く、単なる説話である。三重塔復興に先だって行われた発掘調査では、塔の基壇が掘込地業によるものであることがわかり、その築土から単弁無子葉蓮華文軒丸瓦が出土した。[18] 寺域内から出土する主要な軒瓦は、再建法隆寺で用いられたものとよく似た複弁蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐草文軒平瓦、そして単弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦であり、それらは組合わせて用いられた。前者は六七〇年代以降、後者は六五〇年代のものである。したがって、塔基壇版築土から単弁蓮華文軒丸瓦が出土したことによって、塔建立以前にこの瓦が他の建物で使われたことを示している。すなわち、法輪寺の創建年代を六五〇年代と考えることができるのである。[19]

このことによって法隆寺式伽藍配置をもつ寺が遅くとも七世紀半ばには造営されたことが明らかなのであるが、七世紀前半の建立と考えられている定林寺もまた法隆寺式伽藍配置の可能性が強いとされている。すなわち、大正年間に行われた高橋健自氏の現状調査による報告があり、[20] 昭和二十八年に石田茂作氏による発掘調査[21]でも塔跡とその北東に残る基壇の位置関係から、「法隆寺式伽藍配置としてよいのではあるまいか」と述べているが、いくつか疑問点を提出している。まず金堂が不明であること、塔基壇と西回廊が近接しすぎていること、講堂基壇が高く平面規模が小さいことなどである。

昭和五十二年に行われた奈良国立文化財研究所による調査では、南面回廊跡と考えられていた土塁状高まりが鎌倉時代の築地の残存であり、下層に回廊遺構が存在しないこと、講堂では乱石積み基壇外装を検出したが、それは創建当初のものでなく、鎌倉時代に原位置に再興されたものと報告されている。[22] このように見てくると、定林寺では金堂推定地に何も建てられなかった可能性もある。また、川原寺式を裏返しした形も可能性として残ることになる。

七世紀半ば、または前半代の軒丸瓦が出土する寺跡で法隆寺式伽藍配置を求めてみると、巨勢寺・長林寺・安部寺等がある。安倍寺では、回廊内の西寄りに塔跡が確認され、これに対応する東側で東西に長い金堂基壇が確認され、法隆寺式伽藍配置であることが明らかにされた。[23]

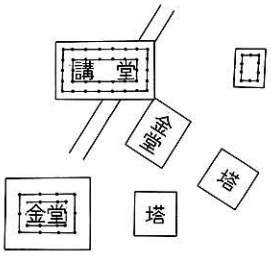


挿図５　川原寺伽藍配置図１：2500

ここで塔と並置される金堂が南北棟の、すなわち川原寺に代表される例を見てみよう。このような伽藍配置が初めて確認されたのは、昭和三十二年から三十四年まで奈良国立文化財研究所によって行われた川原寺の発掘調査に際してである。[24] その伽藍配置は、回廊内の東に塔を、それと対面する形で南北棟の金堂（西金堂）をおく。そして両者中間の北にいま一棟の金堂（中金堂）を置く形なのである。川原寺は斉明天皇の菩提を弔う意図をもって発願された官寺であり、創建年代は天智朝の六六〇年代後半と考えられている。天智朝においては大津京造営の関係からか、京域内に建立された南滋賀廃寺が川原寺とよく似た伽藍配置で造営されている。[25] 回廊内の東に塔を置き、これと対面する形で西に一堂が置かれるがこの堂の基壇規模が僅かに南北に長い。そのために川原寺の系統と考えられている。ただし、これら両者間の北に置かれた建物は講堂と考えられている。

これと同じような配置をもつものとして筑前観世音寺[26]と陸奥多賀城廃寺[27]がある。回廊内の東に塔を置き、西に南北棟の金堂を置いて対面する形である。両者ともに北回廊の外側に僧房跡を検出しているので、金堂と塔の北に北回廊がとりつく建物は講堂である。観世音寺においては川原寺と同笵の軒丸瓦が出土しており、これより遡る瓦が見られないので、その創建年代を知ることができる。しかし、工事の進捗状況ははかばかしくなく、『続日本紀』和銅二年（七〇九）には督促の記事が見える。美濃国守として活躍し養老五年（七二一）に出家した満誓が養老七年別当に任命されているが、これは造営工事推進のための起用だったのであろう。多賀城廃寺は東北鎮護のための官寺であり、その創建は八世紀に入ってからのことである。

この形で注目すべきは、近江穴太廃寺である。穴太廃寺が、大津京の時代に軸線を宮の方位に合わせて建て替えられたことをさきに述べた。創建期の伽藍配置は塔・金堂を東西に置いた形と考えられている。[28] しかも金堂が南北棟なのである。創建の年代については、「庚寅」「壬辰」の干支を記す二点の出土瓦があり、それぞれ六三〇年、六三二年にあてられて

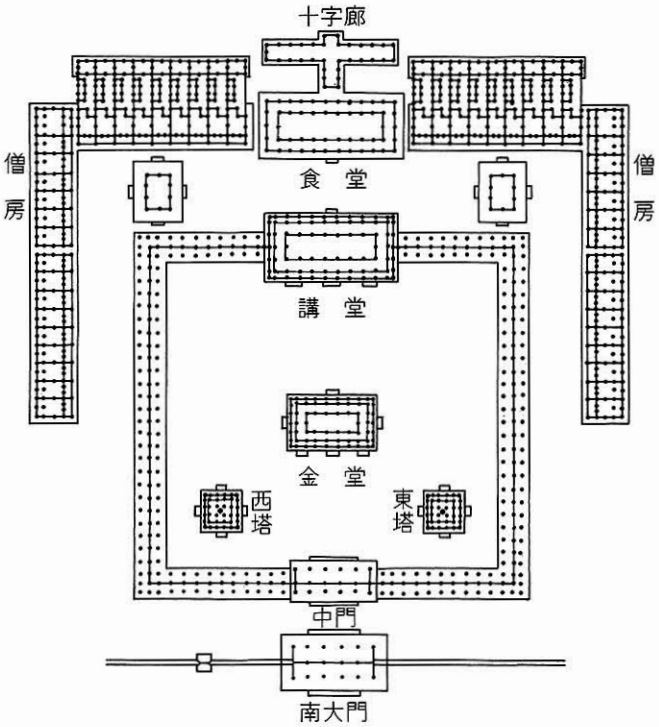


挿図６　穴太廃寺伽藍配置図１：2000

いる。これらの資料から、穴太廃寺の造営工事が六三〇年までに始められたと考えられている。したがって、中金堂に相当する建物遺構は検出されていないが、川原寺式に似た伽藍配置をとる寺としては最古のものということになる。

三　薬師寺式伽藍配置の成立

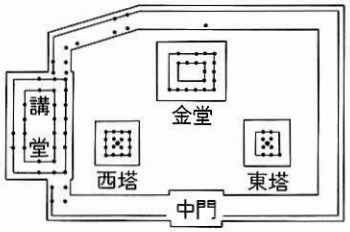
回廊内に塔を二基置く形態は、薬師寺のように金堂の前面東西に塔を置く形と、常陸新治廃寺[29]のように金堂の東西に塔を各一基置く形の二形態がある。後者の類例は乏しく、他に播磨三ツ塚遺跡[30]が知られている程度である。



挿図７　薬師寺伽藍配置図１：2500

薬師寺は『日本書紀』天武九年（六八〇）十一月、皇后の病気平癒を祈って発願されたと記している。このことは平城薬師寺東塔露盤銘にも見えるところである。ところが、皇后の病が癒えたためか、当時進められていた大官大寺の工事が優先され、薬師寺の工事に取り掛かったのはかなり遅れたようである。『七大寺年表』[31]や『僧綱補任抄出』[32]などには天武十一年（六八二）に着工されたことをうかがわせる記事があるが、藤原宮式軒瓦の文様構成との類似からみて、もう数年遅れた時期、六八〇年代半ば頃ではなかろうかと考える。持統二年（六八八）正月の無遮大会は薬師寺で行われているので、このような法要を営むことのできる程度には中心伽藍が完成していたものと考えられる。

他に薬師寺式伽藍配置をとる寺として状況が明らかにされているものには紀伊上野廃寺[33]と河内百済寺[34]がある。また豊後宇佐弥勒寺[35]は回廊の遺構が確認されていないが、金堂に近い位置の前面に両塔があり、金堂と塔の間に回廊が設けられる可能性は少ない。



挿図８　上野廃寺伽藍配置図
１：2000

上野廃寺は先述したように講堂が西塔の西にあり、南北棟である。西面回廊が講堂の南北妻にとりつく。このような配置をとるのは、地形に制約されたためであり、北面回廊から西面回廊へ通ずる所は斜行している。上野廃寺出土の創建時の軒瓦は面違複線鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐草文軒平瓦の組合せである。軒丸瓦の特徴は蓮弁が凹弁ふうであることと、外縁をめぐる鋸歯文が複線に表わされること

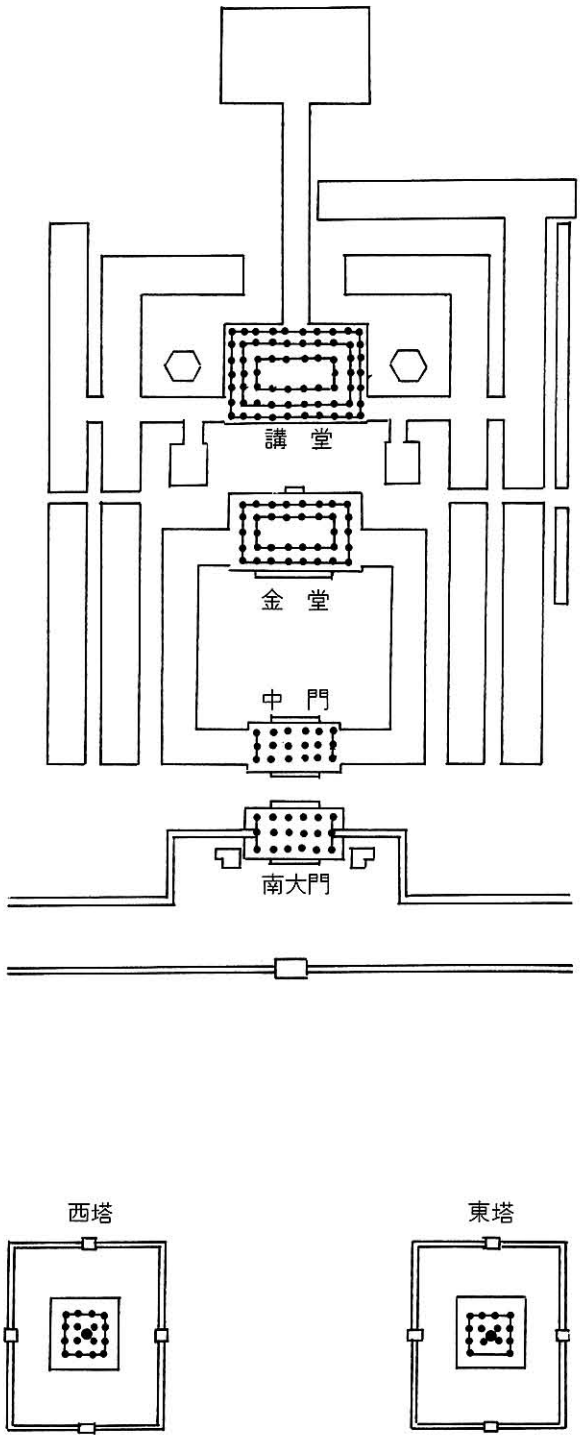
である。文様構成全体の様子は川原寺の系譜をひくものではあるが、複線鋸歯文と凹弁の両者をそなえた類例はこの近辺以外他に求められないので、年代を決めかねる。これと組み合う軒平瓦は法隆寺西院所用軒平瓦の系統に属すものであり、中心飾りの内区が二重線で表されているとはいうものの、外区が分離することなく全体的に古式の要素を保っている。一方、子葉が中心飾りの両側に配されたり、蕾が支葉に変化している点からは、本来のものから時間的な隔たりを感じさせ、法起寺三重塔創建時所用の軒平瓦に近い、七世紀末葉頃の製品といえよう。

河内百済寺は百済王一族の氏寺であり、その造営は官との密接な関係の中で百済王敬福の時代に行われたものと考えられる。そのことは、別稿で述べたように、発掘調査で出土した軒瓦類から首肯されるものであり、橘諸兄政権の下で建立されたものである。[36]

以上のように見てくると、薬師寺式伽藍配置をとる寺では、六八〇年代半ばに工事が始められたと思われる本薬師寺が最も早い例であることが分かる。

四　大安寺式伽藍配置の成立

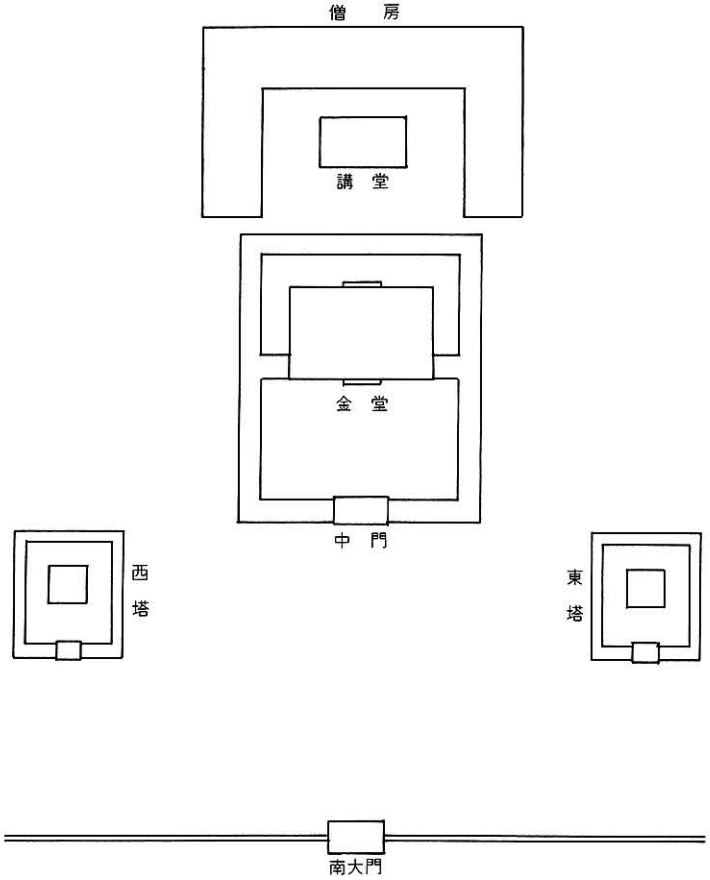
南面回廊の南に塔を二基配置する形態の標式となった大安寺は、平城遷都にともなって藤原京大官大寺が遷されたものである。『続日本紀』霊亀二年（七一六）五月条に「始めて元興寺を左京六条四坊に徙し建つ」とあるが、その地は大安寺の寺地であり、元興寺については養老二年九月条に「法興寺を新京に遷す」とある。したがって霊亀二年のこの記事が大安寺の移建をさすことが確実視されている。現在の大安寺には奈良時代の堂塔は遺存しないが、東西両塔の基壇が見られる。昭和二十九年に建築学会によっ



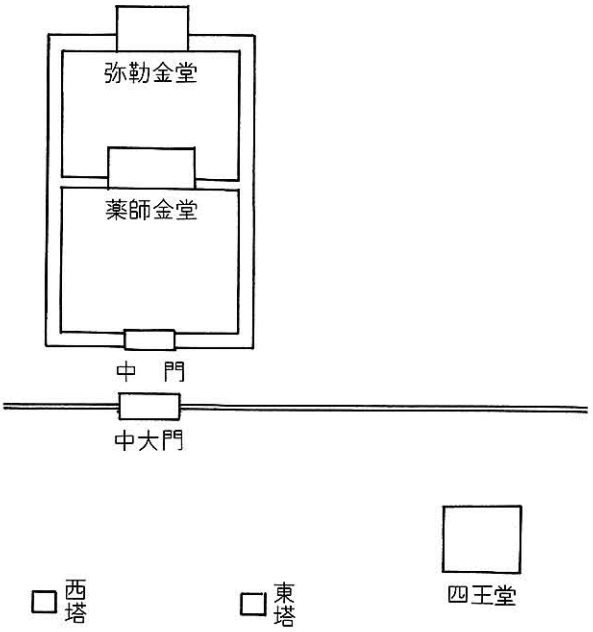
挿図９　大安寺伽藍配置図１：2500

て行われた発掘調査で南門・中門・金堂・回廊等の遺構が確認され[37]、その後に何回か行われた発掘調査によって、講堂や僧房のいくつかが確認された。このような成果と、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の両者から、かなり確実性の高い伽藍配置が復原されている[38]。

大安寺の造営工事は霊亀年間から始められるが、それは大官大寺の堂塔を移築したものではない。大官大寺は和銅四年（七一一）に藤原宮とともに火災で焼失したことが『扶桑略記』に見え、大官大寺の金堂跡や塔跡の発掘調査においても、これらの堂塔が火災で焼失したことを確認している[39]。したがって、『続日本紀』に「徙し建つ」とあるのは、官寺としての寺籍のみをうつしたことになる。ただ、工事が本格的に進むようになったのは天平年間に道慈がこの工事に関わってからのことのようである。『続日本紀』には道慈の大安寺造営に関して「法師尤も工巧に妙にして構作形成皆其の規模を禀く。有る所の匠手嘆服せざるなし」と記しており、従来見られなかった寺観であったことが推察できる。道慈が大安寺の造営に関わるようになったのは唐から帰国した養老二年（七一八）以後のことである。『扶桑略記』や『大安寺碑文』の記事等には天平元年としており、この前後の頃と考えてよかろう。



挿図10　東大寺伽藍配置概念図１：5000



挿図11　西大寺伽藍配置概念図１：2500

大安寺と同じように、東西両塔を金堂院の外に置いた寺は東大寺、法華寺、西大寺等であり、いずれも平城京に関わる官寺であり、その建立年代は大安寺より遅れる。他に秋篠寺と当麻寺も金堂と両塔との間がかなり離れているので、その可能性が認められる。秋篠寺は光仁天皇勅願の寺であり、奈良時代末葉建立の寺である。当麻寺創建に関する確実性の高い史料は残っていないが、寺に残る金堂

本尊の塑造弥勒仏坐像、同じく金堂内に安置されている乾漆四天王像は白鳳時代の特徴をよくそなえたものである。また、梵鐘もその形態や文様から白鳳時代の作であることが認められており、曼陀羅堂（本堂）解体修理の際に発見された押出仏、塼仏もまた同時代のものである。同堂の地下調査で出土した軒瓦は川原寺の瓦当文様をもっている。しかし、当麻寺の東西両塔は、東塔が奈良時代末の建立、西塔は平安時代初期の建立である。したがって、創建当初から西塔建立まで百五十年近くを要しているので、このような堂塔の配置が当初の計画にあったとは考えられない。以上の諸例から、やはり大安寺式伽藍配置は、大安寺において成立したと考えるべきであろう。

五　伽藍配置変化の要因

以上に述べたように飛鳥時代から奈良時代まで、約百五十年間の伽藍配置変化の流れの中では、基本的に四つの形態をあげることができる。その変化をもたらした要因にはいろいろな面が考えられるが、古代における仏教そのものの変化に関わるものと考えられる。七世紀半ば過ぎには仏教が国家仏教化し始めていることは周知のことがらであり、政治に深い関わりのあったことは『続紀』等の史書に見るとおりである。政治と仏教とがそれほど密接であったならば、伽藍配置の変化をもたらした要因の中にはそのような面が大きく反映しているにちがいない。飛鳥寺建立以来百五十年間の中で国家体制と仏教とが最も密接であったと考えられる奈良時代の、政府の仏教に対する政策、そして僧界の状況から検討していこう。

平城遷都の時から、国家仏教化の頂点たる大仏建立、国分寺造営時あたりまでの、政府の仏教に対する政策を『続日本紀』の記事によって追っていくと、僧界に対して細かいところまで規制を加えていることが知られる。

まず和銅六年（七一三）四月には諸寺の田記の誤りを正すべきことが見えており、そのことが具体的に行われたことが十月の記事にあり、寺格以上に田野を占めている寺がかなり多かったようで、多きに過ぎたものを収公している。さらに霊亀二年（七一六）五月に詔を出し、諸国の寺々の中に荒廃したものの多いことを指摘し、それらの寺々の合併を行うよう命じている。寺の荒廃は、この詔で述べているように、必ずしも仏法を尊んでの造営ばかりではなかったからである。「幢幡僅かに施せば即ち田畝を訴う」という点はまさに象徴的である。寺を営むことで利を得ることができたことを示している。この詔に続いて近江守であった藤原武智麻呂が、近江においても同じ状況であり、このようなことでは滅法に至るにちがいないと嘆き、これを匡すことを願っている。おそらく前段の詔は武智麻呂を通じて藤原不比等あたりが言わしめたのであろう。

以上のことは寺院というよりもむしろその寺の造営者に対する規制ととるべきとも考えられるが、養老年間には僧界に対する規制が相次ぐ。養老元年（七一七）四月には近時の法令違反三か条をあげてこれを禁止している。すなわち私度僧を禁じ、行基とその弟子たちの布教活動を禁じ、僧侶が仏法以外の道俗にもとづく呪術によって病人の治療にあたることを禁じている。ここにいう道術とは道教を意味している。民間には広い範囲で道教が広まっていたようであるが、道教は強力な呪咀機能をもっていたと信じられていたため、政府は当初から律令にこれをとり入れなかった。同年五月には、僧尼

がかかえる童子の年令を十六歳以下に限った。翌養老二年十月には太政官から僧綱に対して、僧侶は学問を修むべきことを告げている。すなわち「五宗之学、三蔵之教」を極めるべきであり、秀れた僧侶が居れば宗ごとにこれを録しておくよう、さらに寺を出て山に入っての修行、市井での乞食も併せて禁止している。このあたりから、いわゆる南都六宗として発達した、各宗の教義研究を主たる務めとした形をとるようになるものと考えられる。

養老四年四月には、初めて僧尼に公験を授けることを決めている。ただ、この記事に関連するのか、八月には公験を授けるに当たって、僧尼としての資質に欠ける者が多く、十五名にしか授けることができないとある。このことについては治部省からの報告の形で記されているので、政府の意図する方向に沿った僧尼が少なかったことの表われなのであろう。同年末、十二月には読経に際しての発声に僧侶自らが無闇な工夫をして変化をつける者が多いが、これは仏法を曲げることになりかねないので、今後は道栄・勝暁の発声に従うよう命じている。道栄は漢の僧、勝暁は学問僧と記しているので、政府からみて正統な音声だったのであろう。

神亀・天平年間に入ると得度の基準を厳しくするような記事が見えるものの（天平六年十一月条）、行基集団の行動に対する規制を緩めたところにあらわれているように、僧界への禁止事項に関する記事が見られなくなる。それに代わって大般若経・金光明経の読経の記事が頻繁に見られるようになる。聖武天皇即位の神亀元年（七二三）から国分寺造営の詔の見える天平十三年（七四一）までに限っても、大般若経・金剛般若経が計八回、金光明経（最勝王経を含め）が七回見られる。しかも、その多くが「災異を除んが為なり」（神亀二年閏正月）、「国家を平安ならしめん為なり」（神亀五年十二月）、「国家を安寧せんが為なり」（天平七年五月）、「天下太平国土安寧の為に」（天平九年八月）という除災・鎮護国家の目的が示されている。

大般若経は鎮護国家の経典である。金剛般若経は大般若経の別訳であるから、本来の趣旨は同じである。金光明経は仁王経・法華経とでいわゆる鎮護国家三部経と呼ばれるものである。まさしく仏教による鎮護国家の願いが満ち満ちている。これ以前に大般若経が誦せられたのが大宝三年三月、金光明経が慶雲二年四月のことであり、仮にその間の読経の記録が幾つか『続日本紀』から欠落していたとしても、神亀年間以降に見えるこれらの経典が誦せられた機会の多さは異常でさえある。聖武朝以降の仏教観の変化を感じさせるものである。

この頃の僧界の指導者として注目すべきは道慈の存在である。道慈は大宝元年入唐し、養老二年に帰国した。唐王朝の宮廷において百人の高僧を請じて仁王般若経を講ぜしめた際、道慈は特に優秀であったため賞せられたとある。仁王般若経はさきにもふれたように鎮護国家三部経の一つである。道慈が唐で学んだ詳細は明確でないが、唐王朝で盛んだった鎮護国家を主体とした教義を修めてきたものであろう。天平九年（七三七）四月、帰朝後大安寺に関わるようになってからは、毎年大般若経を転読してきたことを述べ、以後永く続けたいことを奏請してこれが認められている。同年十二月には大極殿において金光明最勝王経を講じている。また神亀五年九月十五日の奥書のある長屋王御願書大般若経御願文には検校として薬師寺僧基弁とともにその名があげられている。このような状況を見てくると、聖武天皇即位以降に大般若経や金光明経の転読が顕著になっ

てくることについては、道慈と聖武朝廷との間の親密さ、道慈が重用された状況をうかがうことができる。すでに養老三年十一月には神叡とともにその学徳のために食封五十戸を与えられ、天平元年九月には律師に任ぜられ、天平八年二月には扶翼の童子六人が与えられるというように厚く遇されていることが知られる。「家伝」には神叡とともに時政をたすけたとあるので、政治力もかなりのものであったと思われる。

その頃、大安寺の造営工事が停滞していたものであろうか、道慈がこれに関与することになった。『扶桑略記』や『大安寺碑文』[40]には天平元年に工事が始められたように記しているが、いずれにしても、それに近い頃に道慈の指揮下で工事が進められることになったのであろう。

完成した大安寺は、何度も述べるように回廊で囲まれた金堂院の南に東西両塔が置かれる形であった。その形が『扶桑略記』に「偸図取西明寺結構之躰」と記すように、唐の西明寺に倣ったものなのかどうか、西明寺の状況が分からないので何とも言えないが、唐において鎮護国家を基本とした寺に身を置いていた道慈自身がその寺に範を求めたであろうことは当然考えられることである。[41]また、『続日本紀』に「構作形成もみな彼より出で」とあるように、広い範囲にまで道慈自身が関わらねば完成されなかった新規のものだったのであろう。このようにして、鎮護国家体制を具現する寺として大安寺の造営が進められ、大安寺式伽藍配置が成立したのである。

さて、さきに薬師寺の造営年代を六八〇年代半ばかと推定した。この頃従来の形態と全く変わった、回廊内に双塔を置く伽藍配置が出現した。政治的な観点からすれば、壬申の乱を経て成立した天武朝は、いうなれば絶対君主制的色彩の濃いものであった。したがって、対仏教という点でも強い姿勢で臨んでいることが知られる。すなわち天武五年（六七六）僧尼の威儀及び法衣の色を制度化し、僧尼は常に寺内に居住して三宝を護るべきことを命じている。そして天武十二年、僧界全体を統轄するために僧正・僧頭・律師を任じた。これは推古三十二年（六二四）に設置された僧官の制度をより強力な形にしたものと考えられる。また天武八年には諸寺の寺名を定めている。ここにいう諸寺がどの範囲のものであるか分からないが、地名でのみ呼んでいた寺に法号を定め加えたというようなことが考えられる。

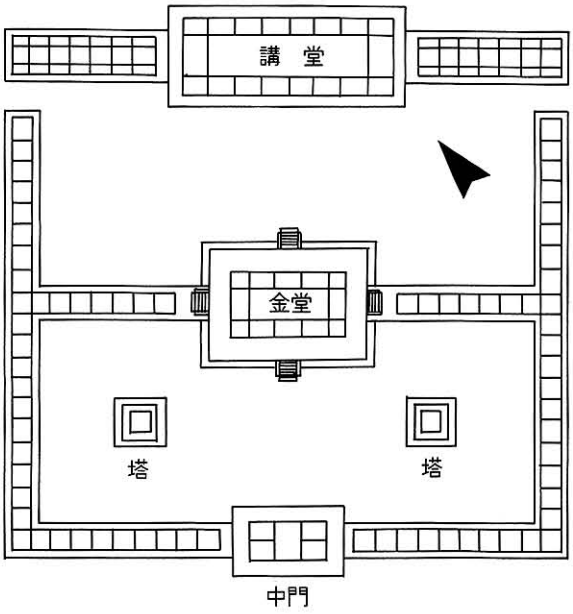
天武朝の仏教政策で注目すべきは官司が治める寺、すなわち官寺の制を定めたことである。『日本書紀』天武九年（六八〇）三月是月条には「諸寺は今より以後、国の大寺二三を除いて以外は官司治すことなかれ。（中略）飛鳥寺は司の治にあつ。然らば元大寺として官司恒に治めき。（中略）官治むる例に入れよ。」とある。この時には飛鳥寺以外に具体的な寺名をあげていないが、後にしばしば、見られる記事から川原寺・大官大寺に飛鳥寺を加えた三寺であることが分かる。官寺の制を定めた目的は、僧界を統轄することはもとより、朝廷の意図する仏教政策が容易に推し進められるよう、朝廷の仏教観が即座に反映されるよう、そのような目的をもって定められたものである。このような考え方をもつに至ったのは、壬申の乱を経験した天武天皇、そして皇后も強力な体制を築く必要性を痛感したからに他ならない。

天武五年（六七六）十一月「使いを四方の国に遣して」金光明経と仁王経を説かしめているのは、その表われであろう。四方の国の範

囲は、他の記事では普通「諸国に」とあるところからすれば、畿内周辺をまず固めるために鎮護国家の経典である、二経を説かしめたものであろう。経典についてさらに注目すべきは天武九年（六八〇）五月紀の「この日始めて金光明経を宮中及諸寺に説く」とある記事である。護国を目的とした経典が宮内に入ったのである。それまで宮内で読まれていた経典は無量寿経や一切経といった、どちらかといえば来世での平安の願いをこめた経典であった。しかるにこの時の経典はまさに鎮護国家を祈る経典であり、天武朝廷としては再び骨肉の争いである内乱が起き、国家が傾くことのないよう願っていたことであろう。こうした願い、考え方、いうなれば鎮護国家の仏教が固まりつつあった時、それをどのように具現化するのか、という面で思い悩んでいたにちがいない、そこにもたらされたのが新たな形の寺であり、塔を二つ設けた寺であった。そうした配置をとった寺を建て、金光明経なり大般若経を誦することによって国家を安穏ならしめる思想が新羅から導入されたのである。

新羅には双塔をもつ寺が多いが、建立の目的が明確なのが感恩寺（大韓民国慶尚北道月城郡陽北面竜童里）である。『三国遺事』[42]万波息笛条には第三十一代神文王が「為聖孝文武大王、創感恩寺於東海辺」とある。そして註記に「寺中記云。文武王欲鎮倭兵。故始創此寺。未畢而崩。為海竜。其子神王。開耀二年畢。（後略）」これらの記事によって、感恩寺が開耀二年（六八二）に完成したこと、この寺は倭から国を護るために文武王が発願したが完成を待たずして王が没したことが知られる。新羅における鎮護国家の寺として、東海すなわち日本海のすぐ近くに建てられたのである。

この感恩寺と薬師寺との近似性は、すでに指摘されているところである。伽藍配置そのものの近似性ということからは、特に堂塔配置の比率があげられている。すなわち、東西両塔の中心距離と両塔中心を結んだ線から金堂までの距離の比率が、薬師寺では一対〇・四〇七三、感恩寺では一対〇・四〇九四とほとんど一致する。また、東西回廊心々と中門心から講堂心までの比率は薬師寺で一対〇・九〇九六、感恩寺で一対〇・九〇九三となり、これもほとんど一致した比率となる。さらに中門・金堂間の距離と金堂・講堂間の距離の比率は薬師寺では一対一・一〇四、感恩寺では一対一・〇四二である。このように、両寺の造営計画に類似性が認められると指摘されている。[43]



挿図12　感恩寺伽藍配置図１：1000

感恩寺が日本から国を護る意図で発願された寺であることからすれば、それと同じものがわが国にもたらされたことは矛盾するようにも考えられる。文武王代のわが国と新羅との間では、天智二年（六六三）に行われた白村江の戦いがあり、その後わが国では大津京への遷都が行われ、朝鮮式山城が相次いで築かれていったように、わが

国でも対新羅という点での防衛措置を講じている。しかしその反面、天智七年には再び新羅と交りを結んでいる。その後にも、新羅との往来の記事がいくつか見られるのである。この状況は天武朝に至っても変わらず、新羅との間は良好な関係が続いている。そのような時、わが国にも仏教による鎮護国家の考え方が強まり、対羅関係の中で感恩寺の具体的な情報がもたらされたものと考えられる。

以上のように大安寺式にせよ、薬師寺式にせよ、そうした伽藍配置の採用は朝廷の仏教観の変化が反映したものと考えることができる。では法隆寺式、川原寺式に代表される伽藍配置成立の要因はどのようなところにあるのか。第二節でこのような伽藍配置をとる寺々の年代を検討した結果、最古のものを特定できなかったものの、法輪寺が六五〇年を前後する頃、安倍寺・定林寺はそれを若干遡る頃と考えることができた。また、近江穴太廃寺については六三〇年代創建の可能性が考えられていることにもふれた。したがって、このような伽藍配置が七世紀前半代に採用された可能性がきわめて高いことになる。

当時の仏教界の状況、というよりむしろ朝廷の仏教政策はいかなるものだったか。顕著なものは僧官の任命であろう。推古三十二年（六二四）一法師が祖父を殴つという事件を契機として百済僧観勒の勧めもあったと思われるが、僧正・僧頭・法頭を任命する。以後はこの機構を通じて僧界を管理することが可能になった。推古朝初期に仏教を公認したとはいうものの、天皇自身が仏教を信仰するに至るまでには、まだ時間を要することであった。舒明十一年（六三九）七月紀に「詔して曰く、今年大宮及び大寺を造作んとす」とあり、天皇自らが寺造営を決意した。ここで完全に仏教が宮中に入り込んだ。このことは古代仏教史の中で大きな出来事である。この時造営が決められた寺は百済大寺と考えられている。同紀には百済川のほとりを宮処とし、西の民が宮を造り東の民が寺を造るべきこと、大匠、すなわち造営指揮者に書直縣を任ずると見え、さらに同年十二月紀には百済川の側に九重塔を建てる記事があり、きわめて具体性を帯びている。しかし、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、百済大寺の寺地を子部社を切り開いて造ったため、その怒りにふれて九重塔と金堂の石製鴟尾が火災で焼けてしまったという記事がある。[44] そして舒明天皇崩ぜんとする際に皇后にこの寺を建て直すことを依頼したととれる記事がこれに続く。どの程度事実を伝えたものか分からないが、舒明十一年に発願して同十三年に火災で塔も金堂も焼けたとなると、僅か二年足らずの間にこの寺を建立したことになり、諸書が説くように信じにくい面がある。しかし、皇極元年九月紀に「大寺を造らんとす」の記事があり、これも百済大寺のことなので、ある程度工事が進んでいた時に火災に罹ったものと思われる。もっとも同年八月紀には、祈雨の記事の中で蘇我大臣が大寺の南の庭に仏菩薩と四天王像を安置し、衆僧を招じて大雲経を読ましめたとある。ここにいう大寺も百済大寺のことと考えられるので、火災に罹ったのは一部なのか、火災の後再建のために法会を行うことができるまでに整備されたのかのいずれかであろう。このように舒明朝末期から皇極朝初期にかけて百済大寺に関する記事がいくつか見られる。朝廷が直接造寺を決意した重要事件の表われなのではなかろうか。

また、宮中で初めて仏典を誦したのは舒明十二年（六四〇）五月のことであるが、これも古代仏教史の中で大きな出来事と言わねばな

らない。宮中に相次いで仏教が入っていったことが知られる。新たな決意のもとに寺を造営するこの時、従来から説かれているように中門から塔を拝し、しかる後に金堂を拝する形でなく、金堂と塔とを同時に礼拝できる形を採用したと考えられるのである。

ただ、薬師寺式伽藍配置が新羅からもたらされ、大安寺式伽藍配置をもつものが唐にあった可能性が高く、最初の寺院造営技術が百済から伝えられた等々を考えると、法隆寺式伽藍配置についても中国大陸なり、朝鮮半島の影響を受けた可能性を考慮せねばなるまい。

六　まとめ

伽藍配置の変化、すなわち飛鳥寺式や四天王寺式の伽藍配置で寺院造営が始められ、その後、法隆寺式、薬師寺式、大安寺式の伽藍配置が出現した契機は、前節で述べてきたように朝廷の仏教観の変化に起因している。その仏教観の変化は、それぞれの時代の内外における政治情勢の変動がもたらしたものであった。崇峻元年に寺工をはじめとして造営技術者達が渡来した記事は、その直後に蘇我馬子が受戒の法を百済僧に尋ねる記事につながっているため、この時の寺造りがあたかも蘇我氏のために百済が技術者集団を送り込んできたように受け取られがちである。しかし『日本書紀』の記事は「献仏舎利（中略）画工白加」とあり、百済の目的は明らかに対朝廷である。仏教伝来に際して蘇我氏が天皇に代わって仏像を祭った形、朝廷に肩代りした同じ形がここでも見られるのである。それほどいまだに慎重にならざるを得ない状況にあったのであろう。蘇我氏としては、仏教寺院を造営する手段を介して新たな文物を取り入れようと考えていたにちがいない。百済が仏舎利と技術者集団をわが国に送ったことは、その前年（六八七）に隋が国を興したことと無関係ではなかろう。東アジア世界の情勢は大きく変わろうとしていた。

このような状況を念頭において伽藍配置変化の足取りをたどれば、その後の周辺諸国の情勢の変化に伴い、朝廷の仏教観もそれにつれて変化し、寺院堂塔の配置そのものが、朝廷に効果をもたらすべき姿のものが採用されたと考えることができる。

そうした仏教観の変化については、すでに前節でふれてきたように使われた経典の種類を見てもよく理解できることである。法隆寺式伽藍配置採用の契機の一つと考えた宮廷内での読経、この時は無量寿経が誦せられているのであるが、無量寿経や一切経は天武六年（六七七）まで幾度か誦せられている。しかし、天武五年に仁王経・金光明経が誦せられて以来、天武六年に一切経が一度飛鳥寺で誦せられただけで、持統末年まで仁王経・金光明経でほとんど占められる。このような鎮護国家の経典を重用することが薬師寺式伽藍配置を生み、一段落した後の聖武朝に至ってより強大な国家として盛んだった唐の伽藍配置が採用されて大安寺式伽藍配置が成立したのであった。この後に造営された官の寺々は、回廊の外に塔を置いた形をとる。ただ、鎮護国家を標榜して各国に造営された国分寺の伽藍配置は一定していない。今後の重要な課題である。

〈注〉

1　奈良国立文化財研究所（以下「奈文研」と略す）「飛鳥寺発掘調査報告」（『奈文研年報』第五冊　一九五八年）

2　奈文研「川原寺発掘調査報告」（『奈文研年報』第九冊　一九六〇年）

3　松村恵司「山田寺金堂・北回廊の調査」（『奈文研年報』一九七九年）

4　文化財保護委員会『四天王寺』一九六七年

5 浅野清『昭和修理を通して見た法隆寺建築の研究』一九八三年
6 石田茂作「伽藍配置の変遷」（『日本考古学講座』第六巻　一九五六年）
7 本薬師寺では回廊の有無は確認されていないが、金堂・塔の規模が平城京薬師寺と一致するので、回廊がめぐっていたものと考えられる。しかし、薬師寺回廊の発掘調査では造営当初単廊で計画されたことが確認された。奈文研「薬師寺発掘調査報告」（『奈文研学報』第四五冊　一九八七年）
8 註6に同じ
9 村田治郎「初期伽藍配置の展開過程」（『史迹と美術』三〇―七　一九六〇年）
10 太田博太郎「南都六宗寺院の建築構成」（『日本古寺美術全集』2　一九七九年）
11 沢村仁「白鳳・天平の寺院建立」（『日本古寺美術全集』3　一九七九年）
12 関口欣也「大陸建築様式の伝来」（『日本古寺美術全集』1　一九七九年）
註8から12まであげたものの他、左記に参考文献を掲げておく。
田中重久「伽藍配置の研究」（『聖徳太子御聖蹟の研究』一九四四年）
田村吉永「伽藍配置の問題―講堂の有無に関して―」（『大和文化研究』三―二　一九五五年）
浅野清「先進地域における寺院の成立と展開」（『日本の考古学』Ⅶ　一九六七年）
村田治郎「初期伽藍配置の問題その後」（『史迹と美術』四〇―八　一九七〇年）
滝口宏「古代寺院の占地と伽藍配置」（『新版考古学講座』8　一九七一年）
藤沢一夫「伽藍配置の学名」（『考古学ジャーナル』一三〇　一九七六年）
工藤圭章「飛鳥寺と法隆寺の建立」（『日本古寺美術全集』1　一九七九年）
坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と僧地の問題」（『歴史考古学研究』Ⅱ　一九八二年）
13 和歌山県教育委員会『上野廃寺跡発掘調査報告書』一九八六年）
14 大橋信弥・中川清「滋賀県穴太廃寺」（『月刊文化財』二五七　一九八五年）
15 「法起寺塔露盤銘文」（「聖徳太子伝私記下巻」『大日本仏教全書』一一二　聖徳太子伝書　一九一二年）
16 立木修「法起寺の調査」（『奈文研年報』一九八一年）
17 町田甲一「法輪寺の歴史」（『大和古寺大観』第一巻　一九七七年）
18 宮本長二郎「法輪寺塔基壇の発掘調査」（『奈文研年報』一九七三年）
19 森郁夫「瓦（法輪寺）」（『大和古寺大観』第一巻　一九七七年）
20 高橋健児「古刹の遺址　二　定林寺」（『考古界』四―三　一九〇四年）
21 石田茂作「橘寺・定林寺の発掘」（『飛鳥』近畿日本叢書　三四　一九六四年）
22 山崎信二・松本修自「飛鳥・藤原宮跡の調査（定林寺の調査）」（『奈文研年報』一九七八年）
23 桜井市教育委員会『安倍寺跡―昭和四十二年度調査概要』一九六八年
田中英夫「奈良県桜井市安倍寺跡」（『日本考古学年報』十九　一九七一年）
24 註2に同じ
25 肥後和男「大津寺址の研究」（『滋賀県史蹟調査報告』二　一九二九年）
26 柴田実「大津寺址」上（『滋賀県史蹟調査報告』九　一九四〇年）
浅野清「埋もれた寺院（古代寺院の発展）」（『世界考古学大系』4　日本Ⅳ　一九六一年）
27 宮城県教育委員会・多賀城町『多賀城調査報告―多賀城廃寺跡―』一九七〇年
28 小笠原好彦「近江古代寺院の伽藍・基壇と寺域」（小笠原好彦他編『近江の古代寺院』一九八九年）
29 高井悌三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』一九四一年
30 兵庫県氷上郡市島町『丹波三ツ塚遺跡』Ⅱ　昭和四十八・四十九年度調査概報　一九七五年
31 「七大寺年表」（『大日本仏教全書』一一一　伝記叢書　一九二二年）
32 「僧綱補任抄出」（『大日本仏教全書』一一一　伝記叢書　一九二二年）
33 註13に同じ

34 大阪府「百済寺址の調査」（『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』四 一九三四年

35 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館「弥勒寺　宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告」（『同資料館報告書』七　一九八九年）

36 森郁夫「奈良時代の政権と寺院造営」（『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』一九八三年）

37 大岡実・浅野清「大安寺南大門・中門及び回廊の発掘」（『建築学会論文集』五〇　一九五五年）

38 大安寺『大安寺史・史料』一九八四年

39 大官大寺跡の発掘調査は数次にわたって行われ、大規模な火災に罹ったことが確認された。なお、現在の大官大寺跡は文武朝に造営されたものであることが明らかにされた。

40 大脇潔・西口寿生「飛鳥・藤原宮跡の発掘調査（大官大寺の調査）」（『奈文研年報』一九七五年以下『同研究所年報』一九八三年までを参照。

41 「大安寺碑」（『寧楽遺文』下　九七八　一九六二年）

42 「弘法大師年譜巻三　上」（『真言宗全書』三八　一九三五年）には、「唐西明寺図」が掲載されており、それには回廊で囲まれた伽藍中枢部の外、わが国の伽藍配置でいえば南大門と中門の間に二基の七重塔を置いた図が示されている。

43 朝鮮史学会『三国遺事』一九二八年

44 岡田英男「薬師寺と感恩寺」（奈文研「薬師寺発掘調査報告」『同研究所年報』第四五冊　一九八七年

「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」（『寧楽遺文』中　三六七　一九六二年）